

## 【実践報告】

## 言葉のスケッチ

井尻貴子

## 1. はじめに

大阪府、京阪中之島線なにわ橋駅内にある、大学と企業とNPOの協働運営によるコミュニティスペース「アートエリアB1」。ここでは、対話プログラム「ラボカフェ」が継続的に開催されている。本稿は、その「ラボカフェ」のひとつとして、2011年2月27日(日)に行われた哲学セミナー「言葉のスケッチ」<sup>1</sup>の報告である。

## 2. ラボカフェと中之島哲学コレッジ

「ラボカフェ」は、大阪大学が主催し、コミュニケーションデザイン・センターがその企画運営を行っている。この名称を構成する「ラボ」は、「ラボラトリー（実験室）」と「コラボレーション（協働作業）」を含意し、人々が語らう場を象徴している<sup>2</sup>。

大阪大学大学院臨床哲学研究室の教員、大学院生およびカフェフィロ<sup>3</sup>は、「ラボカフェ」の一部として「中之島哲学コレッジ」というプロジェクトを実施してきた。具体的には、2008年10月から2009年2月まで、毎週金曜19時から21時の時間帯に、書評カフェ、哲学カフェ、公開セミナー（隔週）を定例のプログラムとして行った。2009年3月以降は、回数を月2回程度に変更し継続している。プログラム提供の大きな目的は、それぞれのプログラムを通し、参加者とともに考えること。基本的には参加費無料、予約不要。誰でも参加でき、途中入退場も自由だ。

哲学セミナーは、この「中之島哲学コレッジ」の一プログラムであり、臨床哲学研究室在籍時から「中之島哲学コレッジ」の運営に関わってきた筆者は、今回の「言葉のスケッチ」では企画進行を務めた。

## 3. 事例「言葉のスケッチ」

## 3-1. プログラム企画意図

「中之島哲学コレッジ」では、ひとつのテーマのもと、2ヶ月間のプログラムを組んでいる。2011年2、3月のテーマは「言葉と／言葉で」。「情報を伝える道具だけではない、言葉のいろいろな側面について、考え、味わっていく」というコンセプトであった。

「言葉のスケッチ」(2/27)のほか、哲学カフェ「言葉で傷つくということ」(2/2)、「言葉のスケッチ」(2/27)、哲学セミナー「笑える悪口／悪口を笑う」(3/9)、哲学セミナー「声で聴く、ソクラテスの対話」(3/25)といったプログラムを行った。また、特別プログラムとして、対談 鷺田清一×西山雄二「哲学と大学の未来」(2/23)も開催した。

ここでは、「言葉のスケッチ」(2/27)というプログラムを行うに至った経緯と、意図を述べたい。

「言葉と／言葉で」というテーマで一プログラムの企画を担当することになり、最初に考えたのは、私たちは「言葉と」何をしているか、「言葉で」何をしているか。そして、そのとき、言葉はどのようなものとしてあるのかということであった。

私たちは日々、言葉とともに生きている。言葉で、自分の思いや考えを表し、他者に伝え、コミュニケーションを図る。それは事実だ。しかし、このように書くと、私の「思い」や「考え」を表すために、私たちは言葉を使うのだと考える人がいるかもしれない。しかし、そうなのだろうか。言葉を使うこと——たとえば、話したり、書いたりすること——に先立って、表すべき「思い」や「考え」は、その話し手や「書き手」のなかにあるのだろうか。

フランスの哲学者 M.メルロ＝ポンティは、「思惟の対象としての言語」というフッサールの言語論やソシュールの言語論を批判しつつ、「私たちは言語の生成のなかに一つの意義を見だし、それを一つの動態における均衡として考えなければならない」と述べる [Merleau-Ponty 2002:7]。「言語の存在についての一つの新しい考え方」つまり「偶然のなかでの論理、方向づけられながらもそれでいてたえず偶然事を同化してゆく体系、一つの意義をもつ一つの全体性への偶発事のくみ入れ、受肉した論理」が必要なのだと [Merleau-Ponty 2002:7]。つまり、言語というものはそれ単独で、一義的な意味を有しているものではなく、〈語る主体〉による「語るという行為」のなかで、表現を行うものであるということだ。川の水にふれたあのひやりとした瞬間を表そうとしても、ただ「冷たい」という語だけでは、それは伝わらない。それは、単に温度に関することなのか。それとも、冬の日に蛇口をひねるときのあの手の平の感覚を表しているのか、あるいは口に含んだ氷が溶けだすときの熱気と冷気がないまぜになったあの感じを示そうとしているのか。私の用いる「冷たさ」という語がどのような冷たさを表すものなのかは、語る行為のなかで、ほかの語との関係のなかで、自分自身に、他者に伝わることによって、現れてくるのだ。

つまり、言語はあらかじめひとつの意味を有しているのではなく、言語に先立って私の思考があるのでもない。言語は、いま私が〈語る〉という行為のなかで、その意味を獲得していくのである。

それはまた、話すということが、まぎれもなく、ひとつの表現行為であり、誰かと話すということは、共同で「対話」という制作行為を行っていることだということを示している。「言葉と／言葉で」何かするという経験は、この創作の経験を含んでいる。しかし、通常、私たちはあまりにも「言葉を使う」ことに慣れ親しんでいて、このことを意識することがない。

そうであるならば、このようなことを改めて体験できるようなプログラムを行いたいと考えた。

では、どのようなとき、言葉がその意味を獲得していく経過を体感し、言葉のありかたについて改めて考えることができるのだろうか。

メルロ＝ポンティは、次のように述べる。

「私が表現をおこなうのは、すでに語りつつあるすべての用具」——既成の文化が私に提供した表現様式——「を利用して、それらの用具がいまだかつて一度も言わなかった何ごとを私がそれらに言わしめようとするときである」 [Merleau-Ponty 2002:15]。ありふれた事象を、ありふれた表現で伝えるのではない。簡単には言い表せないことを、なんとか言い表そうとするとき。私たちは、新たな語の使用法を模索しつつ獲得していく。いや、「あ

りふれた事象」とされていることでもそれは起こりうる。「赤い苺」とはどのようなものなのか、「赤い苺」というだけでは伝わらないとき。その赤さ、かたち、味、それを他者に伝えようとするとき、私は自分の有する語彙を総動員して、伝えようとするだろう。赤い、甘い、小さくて、ころんとしていて……それでもなおも伝わらないとき、私は「赤い苺」を表す、新たな語を獲得するように思える。それは、私は「赤い苺」をそんなふうに捉えていたのか、と気づかされる経験であるだろう。

「語る主体にとっては、表現するとは意識にのぼせることだ。主体は単に他人のために表現するだけではなく、自分の志向しているものをみずから知るためにも表現するのである」[Merleau-Ponty 2002:14] というメルロ＝ポンティの文章は、このことを示しているにほかならない。

「いまだかつて一度も言わなかった何ごとかを私がそれらに言わしめようとする」。参加者からそのような姿勢を引き出すには、いまだ言い表そうとしたことがないことについて語るという時間と、その必要性が不可欠だろう。その必要性のひとつに、「他者に伝える」ということがある。

私は芸術作品や、それとの関わりのありかたへの関心から、視覚に障害のある人との美術鑑賞活動やミルトークといった活動を実践してきた。

言葉で芸術作品を鑑賞する活動のなかでは、「言葉を選ぶ」姿に出会うことがある。目の前の絵画を、彫刻を、言い表そう、他者に伝えようとする。それは簡単なことではない。うまく言えないと落ち込む人もいる。そこにあるもの——その芸術作品は、語る主体にとっては、まだ一度も言い表したことの無いものである。その存在において、芸術作品は、言葉を引き出す。そしてもうひとつ、語る主体から言葉を引き出すものに、一緒に見る、他者の存在がある。他者は、私から言葉を引き出す。そして他者に伝えようとするとき、私たちは自らが言わんとしているものを、同時に知っていくのだ。

美術館を訪れる多く人は、ひとり黙って作品を見入っているように思う。ときおり行われるギャラリートークは、作家や学芸員が、その制作の背景や意図、制作された時代の社会状況あるいは画材や技法などについて解説するものがほとんどであり、一鑑賞者が「それはどのようなものであるか」を言い表す機会はほとんどない。作品について話すといっても、何を話していいかわからない、作品を言語化することに抵抗を覚えるという人もいだろう。事実、すでに絵画や彫刻といった非言語的手段で表されていることを、言語に置き換えようとするのかという批判をうけたこともある。しかし、このような言葉による鑑賞活動において、私が意図していることは、作品の言語化ではない。むしろ、芸術鑑賞に言語が不可欠だなどとは思わない。そうではなく、活動の意図は、語る主体とその思惟との出会いの場の設定であり、語の新たな使用法の模索と発見の契機、芸術作品と他者とともに、新たなものをつくりだす創作の経験の契機を提供することである。

芸術作品を前にし、その絵画を、彫刻を、言い表そう、他者に伝えようとする。そのためぴったりの言葉を探そうとして、言葉につまる。あるいは、言葉を重ね、少しずつ、近づく。まるで輪郭線を重ねるように。それは、たとえば、ジャコメッティのデッサンに似た行為のように思える。揺れる線で、その姿をとどめようとした画家。ならば、言葉に

よる鑑賞活動は、定まらない言葉で、その姿をとどめようとする行為なのかもしれない。そうだとすると、同じテーマについて、描く主体と語る主体が、相互に関わりあいながら、その姿を表現していくとしたら、どうなるだろう。それもまた、新たな表現方法の模索と発見の契機になるのではないか。そんな考えが、「言葉のスケッチ」という企画に結びついていた。

### 3-2. ゲスト：光島貴之

光島貴之は、ラインテープを使い描く「触れる絵画」で知られる美術家である。

公開制作などにも積極的に取り組み、美術館の窓や、展示室の壁に、即興的に描きだす。その姿を、これまでに幾度となく見たことがある。そしてその線が引かれ、像が結ばれる過程を見るたび不思議に思う。線は、像は、光島によって生み出されるのか。生み出しているのは、光島か。

光島は、常日頃から、他者と言葉を交わしながら、制作をすすめる。むろん、一人黙々とキャンバスに向かうこともあるというが、たいていの場合は、言葉でやりとりをすることなくしては完成しないという。それにはやはり、光島にとって、光島の作品が「見えるもの」ではないということが大きな理由としてあるのだろう。全盲である光島は、自身の作品を「視覚的」に捉えることがない。それが視覚的にどのように捉えられているものなのかは、他者の言葉を介し、知る。その制作は、語るという行為と深い関係にある。

光島が哲学コラージュに登場したのは、実ははじめてではない。2008年12月に行った書評カフェ『「眼と精神」を読む』というプログラムのゲストとして登場していた。メルロ＝ポンティの「目と精神」は絵画論として知られている。だがその内容は、ある特定の絵画作品についての論考やいわゆる芸術理論ではない。画家が絵を描くとはどういうことかという問いが、主なるテーマである。メルロ＝ポンティは、絵を描くという行為を、身体と切り離して考えることはできないと言う。それは精神によってなされることではなく、画家の身体によってなされることなのだ。

ここで言われている身体は、物体、あるいは諸器官の総体としての身体ではない。私たちのあらゆる行為の為し手である、生きた身体である。

見るということも、この生きた身体の運動に依拠して起こる。「私が物に追いつき、物に到達しうるためには、それを<見る>だけで十分なのであって、見るということが神経機構のなかでどのようにして起こるのかなどということは知らなくてもかまわない」[Merleau-Ponty 1966:257]とメルロは言う。見るということは、ただ、眼なぞすることによって起こる、見えるものとの出会いである。それはたとえば、私が、窓の外に目を向けることによって、木が見えるものとして現れるということだ。

メルロ＝ポンティはまた、「私の身体が<見るもの>であると同時に<見えるもの>だということ」[Merleau-Ponty 1966:258]に注目する。確かに、このキーボードを叩いている手を見ているのは、私であり、また見られているのも私である。このようにして、見ている自分を、見られている自分として感じる、その実感をもっているからこそ、私は、自分の身体はこの世界に属していると感じることができる。身体は、見える世界に属し、そ

の一部をなしている。それは世界の一部であり、世界に取り込まれているとともに、世界を創出させている。その二つは常に重なりあっているとメルロ＝ポンティは考えるのだ。

書評カフェでは、このようなメルロの「描くこと」、「見ること」についての考えを、光島と検討する時間を持った。ここではその議論を詳しく振り返ることはしないが、全盲である光島にとって、メルロの論考は「見る」ことについての新たな示唆を与えるものであったようだ。そして、光島の自身の経験に即した言葉も、私たちにとって、新たな示唆を与えるものであった。

メルロは「目と精神」のなかで「見る者はただその眼なごしによって物に近づき、世界に身を開く」[Merleau-Ponty 1966:258]と述べている。この表現は、見るという行為が世界の発現の根底にあるということだと解されてしまう可能性がある。確かに、窓の外に目を向けることによって、木が見えるものとして現れる。それは、私の世界が、木のある世界となるということでもある。それはまさに、世界を創出する行為であると言えるだろう。

しかし、それは、眼なごしによってしか為されえないことではない。

身体の行為、その行為と切り離されていない生きた身体を拠点として世界が開かれていくという意味では、あらゆる行為に関して言えることだろう。しかし、多く人は眼なごしに頼るところが大きいかもしれない。そうだとすれば、眼なごしに頼らない身体である光島は、私たちに、異なる世界の現れ方を示してくれるのかもしれないと思える。そして、それは見るとはどういうことかを、問うものとしてあるかとしれない。その意味で、光島の作品は「見る」という行為とも、深い関係にある。

その光島と、参加者が、線で、言葉で、同じテーマに迫るとき、そこにはどのようなものが現れるのか。言葉から生まれる。言葉が生み出す。線から生まれる。線が生み出す。それが追いかけて、追いかけてられ、反転し、どちらが先ともわからなくなる……そのときに現れるものは何か。その制作過程は、描くことと、話すこと、見ることが絡まり合う過程にもなるだろう。本プログラムでは、そのさまをつぶさに見たい、見せたいと思った。

### 3-3. テーマ：雲の手触り

企画を固め、次のような案内文で参加の呼びかけを始めた。「全盲の美術家、光島貴之さんが参加者の言葉をもとに、その場で作品を制作します。ライブペインティング終了後はその作品についてみなさんと話したいと思います。どんな言葉から、どんな作品が生まれ、また言葉がひきだされるのか。ぜひご参加ください」。

テーマを決めるにあたっては光島と相談し、参加者が言い表すことに慣れていないもの、固有のイメージがないもの、知っているようで実はよく知らないもの、そして光島が知りたいと思うものといったことを条件として挙げ、最終的に「雲の手触り」とした。

プログラムは3時間。テーマについて話し、描くのはそのうちの140分程度、残り40分は、出来上がった作品について話すことに決めた。また、光島と事前に会場の下見を行い、作品は高さ1メートル、横幅、7メートルの透明シートを壁に貼り、そこにラインテープやカッティングシートを用いて描くことにした。

プログラム開始。最初に光島が簡単に「雲」について語った。10歳の頃に失明し、空の青さの記憶はあっても、雲の記憶はない。雲と聞いて思い浮かぶのは・フォーク・クルセダーズの「帰って来たヨッパライ」の歌詞に出てくる「雲の階段」。雲の形といえばその形という。

そこから、参加者に問いかけた。

「雲は空に浮いていて、軽くて掴めないもの」という最初の発言に続いて、「雲を意識するのは飛行機に乗ったとき。あの小さな窓から雲の中に突っ込んで行くときの、分厚さとか重さのイメージがある」という人がいた。少しずつ参加者がそれぞれの、雲の経験を話す。

その言葉を聞き、光島も描きはじめた。そのときのことを、彼は次のように記している。「会話の始まり具合や、時間配分を意識して、とっさに中央の雲と7メートルを横断する2本のラインに取りかかった。黄色のラインが飛行機雲で雲の中に突入している。そんなイメージが会話の始まりでもあった。」<sup>4</sup>

画面に、2本の線が現れた。参加者は、それを見つめながら、雲についての話を続けた。

雲のかたちってどんなかたち？

雲をどのように感じてる？

雲を触ったことがある？

それはどんな感覚だった？

もし触ったとしたら、どんな感触だと思う？

といった質問に答えながら、参加者は言葉を重ねる。もっとも長く続いたのは入道雲についての話だった。その形を形容しようとし、もくもくしていると言う人もいれば、ずっしりしていると言う人もいた。ビールの泡のようだ。シュークリームが重なったようなかたち。巨大なブロッコリー、ぷーっと膨らんだお餅みたいと様々なイメージが提示された。光島は、ひととおり聞いてから、青いラインテープで、かたちを描き出した。

高い山に登った時、触ったことがある。雲のなかに入ったことがあるという人もいた。身体にまとわりつく。つつまれる。霧みたいだったとその感覚を表現していた。入ったことはないという人もいた。けれども、乗ってみたら、きっとぼよんぼよんしていると思うとその人は述べた。移動遊園地のトランポリンのようだと思うと。その言葉に、聞いている私のうちにも、あの体の定まらない感覚が思い起こされた。

それらの言葉を追いかけるように、ときに先行するように、光島は画面に向かい、線を引き、かたちを与えていった。

140分が過ぎる頃、そこには確かに「雲の手触り」が現れていた。光島の描いた画面のなかに、そして、参加者の対話のなかに。

そこに現れた画には、参加者の言葉が影響している。しかしそれは、光島による、参加者によって言語化されたイメージの再現ではない。光島の固有のイメージの表象でもない。それは、光島の「雲の手触り」であり、参加者の「雲の手触り」でもある。その場で行われた協働制作行為のなかで生まれた、作品と言えるのではないだろうか。

## 4. おわりに

本稿では、プログラムの企画進行者という立場からひとつの実践「言葉のスケッチ」を振り返ってきた。本稿では、本プログラムで交わされた対話をそのまま収録することはない。本プログラムにおける対話は、そこに身体をおき、そこでその対話を味わうという経験のなかにあったと考えるからだ。第3章での概要の紹介にとどめたい。また、どの発言が、作品のどの色や形に影響しているか分析することも、ここでは行わない。それは、本稿の目的ではない。

第2章でも述べたが、光島の制作行為には、描くということ、話すということ、見ることが根源的に関わっている。しかし、これは、光島に限ったことではないだろう。この3つの行為は一見、個別の行為と思われるかもしれないが、絵を描くあるいは作品を作るという行為のなかでは、多少の違いはあれども、絡まり合い、互いに影響し合っているように思う。そして、その絡まり合いのなかで、表現というものは、ときに揉まれ、ときに温められ、やがて表出してくるのではないだろうか。光島はその顕著な例に過ぎない。

その絡まり合いを、孵化の過程を、そのままに、差し出すこと。それが、私の実践であり、本稿ではそのありかたを示すことができたのではないかと思う。

実践は、多様な人に、多様な語り口で語られるものであってほしいと考える。そうされることにより、その実践は厚みを増し、続いて行く。そんな考えから、最後に、参加者の感想を列挙し、この報告を終えることにしたい。

「雲についてみんなよくしゃべるなと思った。普段からみんな雲に注意して生活していたのか。この場のテーマとして雲というものが、話したくなるものとして作用したのか。」

「感覚で見る世界と、イメージの世界は違う。」

みんな脳の限界を超えたところにイメージをはせているように感じた。

ここにいる1人1人の違う感性を、光島さんのチューブを通して表現されたのがおもしろいと思った。」

「雲という身近なものが、参加者の人たちの言葉で様々な形で語られていくのは興味深かったです。」

いつも視界の端に存在している身近なものである雲、ですが同時に触れることのできない遠い存在でもある雲というものの不思議さをあらためて思い知りました。」

「目が見えない事。」

目が見える事。

雲というものは表現においてあまりその事は、関係ないのかも？

とても面白い作品だと思います。」

「同じ言葉でも色んな表現方法、イメージ、とらえ方がある。」

「雲の手ざわりというテーマに多くの意見が出ておもしろかった。」

「本日のテーマは、雲について考えることでしたので、とても興味深かったです。  
自分なりにいろいろなイメージを抱くことができたので、とても楽しかったです。」

「雲の話でこんなに何時間も楽しく話をするのが出来るのにおどろきました。  
対話とドローイングの関係もしっかりきていて楽しめましたが途中アーティストの方の  
意見やコメントももう少しおうかがいしたかったです。」

「正直いうと自分が満足がいく切り口ではなかった。  
しかしでは自分が納得がいく『雲』のテーマの切り口とは何か、と考えさせられた。」

「雲のイメージを普段考えたこともなかったので、とらえるのが難しかった  
表現の作成過程を見たのが始めてだったので面白かった。」

「途中から参加したのですが、作品をみてきもちよかったです。  
みなさんの作品に対するコメントも。」

「言葉と表現と『イメージ』との関わりを面白く体験できたなと思います。とても楽しか  
ったです。」

「雷雲に入った経験の話にとっても驚いた。」

「雲についてこんなに長く話し合ったのがはじめてだったのでちょっと不思議な体験でし  
たが、楽しかったです。  
普段それほど深く雲について考えたことがなかったのでイメージを言葉で説明するのが  
これほどむつかしいと思いませんでした。  
自分の言語能力の低さにちょっと失望しました。」

「意外と、視覚は言葉になり、言葉は、視覚的イメージになれるんだなと思いました。  
視覚(見た)と思っていたものが、それ以外の感覚からのインプットなのかなと思いま  
す。  
『手ざわり』についてはもっとほり下げる可能性があるような気がします。」

「ライブで描かれる様子を拝見させて頂けて貴重な体験でした。  
言葉が与えるイメージについて考えを巡らせることが出来ました。」

「光島さんの方にイメージをつたえる事がなかなかむずかしくもあり楽しくもあった。  
光島さんの作品が実際にできると雲がみえました。」

「とても面白くて、光島氏を存知上げる事ができたことも良かった！  
またこのような場があればと願います！」

## 文献

松川絵里、小菅雅行、本間直樹「ひとつではない哲学<中之島哲学コレージュ」, 2011年

M・メルロ＝ポンティ、木田元・滝浦静雄・竹内芳郎訳、木田元編「言語の現象学」(メルロ＝ポンティ・コレクション5)、みすず書房、2002年

M・メルロ＝ポンティ、滝浦静雄・木田元訳「眼と精神」みすず書房、1966年

## 脚注

\* 1. ラボカフェ／中之島哲学コレージュ：哲学セミナー「言葉のスケッチ」(2/27)

○日 時：2月27日(日) 14:00-17:00

○場 所：アートエリアB1 (<http://www.artarea-bl.jp/index.html>)

○ゲスト：光島貴之(美術家・鍼灸師)

○進行役：井尻貴子(カフェフィロ)

○カフェマスター：本間直樹(大阪大学CSCD教員)

○備 考：定員50名(入退場自由、先着順)。

○参加費：無料

○主 催：大阪大学CSCD／アートエリアB1／カフェフィロ

\* 2. 大阪大学コミュニケーション・デザインセンター HP

<http://www.cscd.osaka-u.ac.jp/activity/view/439> 2011年7月30日アクセス

松川絵里、小菅雅行、本間直樹「ひとつではない哲学<中之島哲学コレージュ」, 2011年

\* 3. 「社会のなかで生きる哲学」を探求し、それらの実現にあたりとともに、哲学とともに生きる人たちをサポートする活動を行う団体。大阪に活動拠点をおきながら、各地で哲学カフェやセミナーの開催、進行役の派遣、対話の場づくりのコーディネーターなどを行っている。

カフェフィロ HP <http://www.cafephilo.jp/index.html> 2011年7月30日アクセス

\* 4. 光島貴之ブログ「窓を少し開けて」「4月12日 言葉をリアルタイムで描く」より

<http://mitsushima.txt-nifty.com/> 2011年7月30日アクセス